

---

# 俺の世界：さらに一万年後

たまご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の世界：さらに一万年後

### 【Nコード】

N75400

### 【作者名】

たまご

### 【あらすじ】

俺の世界2シリーズ目です。ある日神谷伊予は帰り道で不気味に光る魔法陣を発見！？しかもそれに触れてしまった！？勇者になる話。主人公神谷伊予は自分の世界に帰れないということで、とりあえず魔王（笑）とやらを倒す旅に出る。伊予がシンヤからもらった能力は I C B M 敵を駆逐します。

## 好奇心は日常を殺す魔法陣とか

その日、神谷伊予（16歳）はいつも通り学校で授業を受けいつも通りに下校していた。・・・不思議に光る魔法陣を見つけるまでは。そしてそれに触れどこかに引きずり込まれるまでは。

「ここ、どこだろう？」

気がつくと思つ白な空間にいた。

「お、気がついたか？」

目の前には不思議な男の人。若そうなのにとても威厳を感じる。いや、威厳というより恐怖？

「あなたは誰？」

「俺か？俺は今からお前が行く世界の主神だ。名前は鉄神矢。お前が神谷伊予だな」

「うん・・・そうだけど・・・。なんで私こんなところにいるの？で、今から行く世界って？」

「それについてはいまから説明する。まず俺の世界の人間が勇者召喚の儀式をした。普通なら成功しないのだが、お前がいた世界を管理しているクソ神がおもしろそうだからという理由で、お前が召喚の魔法陣を発見してそれに触れるようにした。それによってここにお前は飛ばされてきた。以上、わかったか？」

「つまり儀式をした人間と私の世界の神が原因ってこと？」

「そう。物分かりいいな、お前。それで俺としては元の世界に戻してやりたいんだけど、あの神の方が位が高いから無理だ。というところで、なんか能力でもあげようかなと思ったんだが、いる？」

「いる！！」

なんかよくわからないけど、とりあえずもらえるものはもらおう。ないよりはましだ。

「じゃあ・・・ICBM（大陸間弾道ミサイル）威力・大きさ調整可で行こう」

ちよっ！？それってほぼ最強じゃ！？あゝでも・・・

「科学とかどれくらい発達してるの？」

それによつてはまったく無駄かも知れないし。

「ほとんど発達してないよ。魔法が発達しているが」

よし。使える。

「じゃあもう飛ばしてもいいか？」

「うん」

「じゃあまたな」

またなとはどういうことを考えやっぱいいやと思いつつ伊予の意識は落ちていった。

好奇心は日常を殺すゝ魔法陣とかゝ（後書き）

1シリーズの方を更新するほうが多いので更新は不定期です。

実はそんなにお呼びではなかった勇者ちゃん（前書き）

びみょーに適當です。

実はそんなにお呼びではなかった勇者ちゃん

目が覚めると私は魔法陣の上に立っていた。目の前には銀髪碧眼のきれいな巫女さんがいた。

「ようこそ、勇者様。私はカグラと申します。」

「私は神谷伊予。この世界風にならイヨ・カミヤだね。話は神様から聞いているよ。私になにをしてほしいのかな？」

「はい、魔王を討伐してほしいのです。」

「その、魔王、とは？」

「魔王は魔物の最上位の君臨する個体で人以上の知識と並はずれた、身体能力を持っています。何百年かに一度現れ災厄をまき散らし、そのたびに勇者と呼ばれる人が現れ倒したといわれています。」

「ちょっと待つて。いままではこの世界の人が倒してたんでしょ？神様が今まで勇者召喚の儀式が成功したことないって言うてたし。なんで勇者召喚の儀式を行ったの？」

「その前にさっきからおっしゃている神様とは誰のことですか？」

「シンヤ・クロガネって名乗ってたけど……。」

「聞いたことないですね……。古い文献にあるか調べてみましょう。それより何故勇者召喚の儀式を行ったかですが、簡単にいえば恒例というか慣習みたいなものです。」



「つまりそんなわけわかんないことで呼び出されたってわけ？」

「ええ、まあそういうことになりますね。」

ふざけんなよー！

「それよりこれからのイヨ様の待遇ですが・・・まあ自由にしてください。」

「なにそのテキトーー！！」

「とりあえず王様には会っていただきますが。」

1時間後。カグラから色々と説明を受け、王様の前、いや御前にいた。

「そなたが勇者か？私はスライデン王国国王、ジョージ・ファン・レステ・ラ・スライデンだ。」

「私はイヨ・カミヤというものです。」

「単刀直入だがそなたに魔王を討伐しておらいたい。魔王率いる魔物の軍勢が最近王国内を荒らしているのだ。」

「別にいいですよ。」

「そうか！！ありがとうございます！！ならすぐに旅立ってほしい。金貨10枚を持たせよう。」

「ありがとうございます。」

カグラの話から考えるに銅貨が100円、青銅貨が500円、銀貨が5000円、金貨が1万円。王様、こんな小娘に100万円も持たせて大丈夫？

その日のうちに城を出た。いや、追い出された？

さっそく仲間が増えました！って神様と女神様！？」

私は城を出た（追い出されたともいう）後、城下の街に行きました。魔王を倒す。なら、いろいろと旅をしたり魔物とかを倒さないといけない。ということで、武器とか防具とか食糧とかを買いに行きました。・・・そうはいつでもどこへ行けばいいのか全くわかりません。どうしよう。そう悩んでいたら、長い白髪に燃えるような紅い瞳をしたきれいなお姉さんが話しかけてきました。

「あなたが神谷伊予さんね？」

「はい。そうですけど、なんで？」

この人は何故私の事を知っているんでしょう。

「とにかく、私に着いて来てくれますか？」

良くわかりませんがとりあえずついて行くことにしました。

謎のお姉さんに着いて行くと、古びた鍛冶屋みたいなところに着きました。

「みたいな、ではなく鍛冶屋よ。」

「ソラ、お帰り。お使いご苦労さん。」

中から声がして誰か出てきました。その青年はなんていうか・・・

「神様!？」

あの真っ白な空間にいた神様でした。

「いやーあの後お前をずっと見てたんだが、かわいそうになってきたというかなんていうか・・・」

「あの一そちらの方は？」

「ん？ああ、女神だ。ていうか俺の嫁」

「ソランザムです。よろしくお願いします、伊予さん。」

「よろしく。・・・ところで神様が私に何の用ですか？」

「ちょっとお前を見ているとかわいそうになってきたんで、俺らも魔王を倒す旅に着いて行こうかと。」

「一人旅はさびしいだろ？あまり世界に干渉はしないがサポートぐらいはできるから。」

「なんていうか・・・この神様いい人だ!!」

「あの」

「なんだ？」

「ありがとうございます!!」

「いや、別にいいって。もとはといえばあのコソ神が悪いんだし。」

「とりあえず武器を造ってあげるからってそういえばあげた能力、もう使ってみた？」

「いえ、まだです。使い時がなくて・・・。」

「そりゃそうだろうな（笑）・・・じゃあ武器作ろうか。どんなのがいい？」

「日本刀って作れますか？」

こう見えても私は剣道少女だったのである。ちなみに初段。

「作れるよ。君より未来の人だし。俺。」

「それってどういう・・・？」

この世界を造った神様なら私よりも年とってるんじゃないさ。

「すべての時空が時間通りになっているわけじゃないさ。」

よくわかんないや・・・。

「うん・・・。よし、決めた!!二刀流ってできるよね？」

「はい、できますけど・・・なんでしってるんですか？」

誰にも言わずに練習してたのに・・・

「神様だから。ふんっ!!」

神様の手が光りだしました。そして光がおさまると・・・二振り  
の美しい日本刀がありました。

「できた・・・。名前をつけてあげて。そしたら君のものになるか  
ら。」

とてもきれいです。どんな名前にしよう・・・。そうだっ!!

「では・・・長いほうを美斬、短いほうを美鈴のします。」

由来は美斬は美しく斬る、美鈴は鈴のように美しくという感じ。  
この子達の持ち主としてふさわしくならなきゃ。

「じゃあ店の外に出て。」

「わかりました。」

店の外に出るとそこは入ってきたときと違い何もない荒地でした。

「ここで修行しようか。じゃあソラよろしく」

「わかりました。シンヤさん。では、修行をしましょう。」

こうしてソラさんとの修行が始まった。

さっそく仲間が増えました！っつて神様と女神様！？（後書き）

感想を書いてくれると嬉しいです。

## 神様と訓練

ソラさんの教えてくれる剣技は実践的なもので、今までクラブなどでがんばってたことはほとんど役に立ちませんでした。だから、ほとんど最初から。基礎の基礎からやりました。・・・それにしてもソラさんは何故刀の使い方を知っているのでしょうか？神様がこの世界に刀は無いといってたのに。

剣の訓練が終わった後は、神様との魔法の訓練です。訓練といっても神様が調べたところ、私は魔法の無い世界から来たので魔力を持っていないのだそうです。それで、神様は魔法は使えないことはこの世界では圧倒的に不利なので、魔法を使ってくる敵と戦う訓練をスルゾー！！といいだしました。

「刀に魔法無効化能力を付与しておくけど、魔法が無い世界から来たから魔法がどんなものか知らないだろう？だから最初は見てる。後から色々やってもらうから。」

「はい。」

「じゃあ、まずは……『ファイアー・ボール』」

神様が唱えると、バスケットボールぐらいの火の球が空中に出現しました。なるほどこれが魔法ですか

.....すごいです。私は使えないなんて残念です。

「凄腕の魔術士や高位の魔獣は魔力を大量に持っているから、同じ魔法でもほら……『ファイアー・ボール』」



今度はとてつもなく大きな、小さな太陽のような火の球が現れました。

「魔力の量次第で大きさや質が変わってくる。だから、魔法は使い勝手がいいんだが・・・伊予に教えてもしょうがないか。」

神様は火の球を消しました。

「じゃあ、刀だして。」

「はい。」

神様は私の差し出した美斬と美鈴に触れると一瞬光ったような気がしました。

「魔法を無効化できるようにしたから。じゃあ構えて。」

よくわかりませんが二つとも構えます。すると・・・

「よけるなよ『ファイアー・ボール』」

神様がいきなり火の球を撃つてきました。とっさに避けます。

「危ないじゃないですか！！いきなり何をするんですか！！」

「避けるなつつたろーが。何のために刀を構える時間を使ったと思っただ。」

刀を構える時間を使った？それってつまり・・・

「あの火の球をこれで斬れと？」

「そうだ。それなら斬れるから。『ファイアー・ボール』」

また神様が撃つてきました。しかも今度はさっきより大きいです。

「せいやつー!!」

美斬で真つ二つに斬ります。すぱつと二つに割れて後方に飛んで行きました。

「その調子その調子。さすがソラの弟子。」

神様のほめられました。えへへ#

「じゃあどんどんいつてみよか」

今度は何も言わずに火の球を撃つてきました。いろんな方向から。

「やあ!!とうつ!!せいやつ!!はっ!!」

左右と正面からきたのは斬れましたが上から来たのは避けられませんでした。

「うん。それでいいよ。無理に斬ろうとして怪我するより避けたほうがいいから。しっかり見極めるように。」

この後、ずっとこの『訓練』をしました。ボロボロになってソラさんに止められるまで。

世間って以外と狭いよね（前書き）

更新遅れてすいません。

世間って以外と狭いよね

今日は「ICBM」の使い方を教えてもらいます。

「使い方なんて簡単簡単。座標を指定して、威力と大きさ、それから数を指定。そして解き放つ！！全部イメージだから。とりあえず頭出して。」

よくわかりませんが神様に言われたようにします。神様が私の頭に手を触れます。すると、いきなり頭が割れるように痛みを伴って数々の情報が流れ込んで来ました。

「頭の中に座標指定用のプログラムを無意識領域に送っておいたから、何処の落とすとかイメージしたら無意識に座標を指定できるから、がんばれ。まずは、威力を調整せずにそのまま撃ってごらん？」

神様の話は難しいです。でもなんだかわかったような気がします。座標・・・100キロぐらい先。大きさ・・・適当。威力・・・適当。発射！！

ずいじうじうじうじうじうじうじうじうじうじうおおおおおお  
 おおおおおお！！！！！！！

巨大なミサイルが空中に出現＆飛んで行きました。



神様に当たるとミサイルは消えてしまいました。神様はこちらを見て笑っています。

「上出来、上出来。最初っから使いこなすなんて。さすが俺の姪。」

「・・・・・・・・はい？姪？」

「めめめ、姪ってどういうことですか！？」

「伊予の母親は卑弥呼だろ？あいつは俺の妹なの。」

「で、でも、おじさんは確か国外を奥さんといっしょに放浪してるって・・・。」

「ここ日本じゃあないし。奥さんはソラ。だからソラは伊予のおばさんだな。」

「ひどいですね、シンヤさん。私まだまだ若いですよ？」

「1万年以上生きてる癖に何いつてる（笑）・・・とにかくあのクソ神が俺に素質があるとか何とかいってたから血の繋がってる伊予にも素質があるんだろ。」

驚き桃の木                      です！！そういえばこの世界の事をお母さんは知っているんでしょうか？

「知ってるよ。あつちの世界に戻った時に一通り話した。で、伊予のことも話した。心配してたぞ？変なことに首つつこまないか。」

・・・よけいなお世話です！！ていうか写真でみた姿とまったく違うんですけど！！写真の中のおじさんはとてもきれいで女の人みたいでした。髪も長かったし。

「それは俺が魔法をかけてるから。じゃあ一回解いてやろう。この世界で俺の本当の姿をしってるのはソラだけだからかなり希少価値があるぞ？」

そういつて神様もおじさんが指パッチンをする、その身体が輝きだし、そして光がおさまると・

・・・・・・・・・・・・・・・・美少女なおじさんがいました。

## 旅立ちの日

前回のあらすじ（担当はソラ）  
ひさしぶりにシンヤさんの本来の姿をみました。いつもそのまま  
でいいのに。

神様達と修行を初めて一か月経ったころ。2人から卒業証書をも  
らいました。賞状には手書きで一般人技能検定1級合格おめでとう、  
と書かれていました。

「合格したところで旅にでるか。」

「魔王を倒しに行くんですか？」

「うんにゃ。あのクソ神が言うには魔王が持つてる指輪にはめてあ  
る宝石で元の世界に戻るようにしたって言ってたから、倒さなく  
ても交渉すればいい。だからとりあえず魔王に会いに行く。」

「転移魔法は使えないんですか？」

「伊予は転移できない設定になってた。」

「・・・残念」

「まあ、この世界を回ってみたらどうだ？俺の作ったこの世界を」



次の日。神様が旅するには金が必要だ！！といただいたので、神様達とギルドに行くことになりました。

「すみません、この子の登録したいんですけど。」

「はい。じゃああちらの紙に必要な事項を書いてください。書き終えたら、持ってきてください。」

私が紙にいろいろ（年齢とか性別とか）書いている間に神様達が依頼を受けます。

「SSのシンヤとソラだけど。護衛系の依頼無い？3人で受けれる奴。」

「はい。少々お待ちを。……ありました。Bランクでエルフの国までの荷物の護衛というのがありますね。」

「じゃあそれ。俺とソラともう一人は今から登録する。」

「わかりました。」

皆さん私を待っているようです。いそがねば。職業ってどうすればいいんでしょうか。神様に小声で相談します。

『職業ってどうすればいいんですか？』

『勇者でいいだろ』

職業欄に勇者と書いて提出します。

『ちなみに2人はなんて書いてるんですか？』

『『神』』

「……神様の受けた依頼は私レベルでも簡単な奴だそうです。襲いかかってくるのは盗賊ぐらい。修行で人を殺すことに馴らされたのでたぶんだいじょうぶです。最初は気持ち悪くて吐きそうになりましたが、もう大丈夫です。」

「そういえば、エルフって何ですか？」

「ファンタジー小説とか読んだこと無いのか？」

「はい。興味なかったの。」

「じゃあ説明するか。といっても直接見た方が早いんだがな。」

なんだかんだでうだうだ言いながら神様は説明してくれました。

1・身体的特徴・・・耳が長い。人間と比べて美系。500年以上生きる。

2・種族的特徴・・・神様達を信仰している。寿命が長いせいか基本、のんびりが多い。今は人間とは仲がいいが昔は悪かった。いいタイミングで魔物がやってこなければ正直危なかったらしい。

「エルフの国では伊予は危ないかもな。」

「なんでですか？」

「ついこの前・・・といっても300年ほど前だが、エルフと人間は互いに憎み合っててしょっちゅう戦ってたんだよ。だからその頃の事を覚えてるエルフはいまだに人間が大嫌いだからな。エルフの国で暴漢とかに襲われても見て見ぬふり宿賃とか高くて当たり前。ということではエルフの国にいる間は俺がソラとっしょにいることわかったか？」

「はい。」

「じゃあ依頼の待ち合わせ場所に行こうか。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7540o/>

---

俺の世界：さらに一万年後

2010年11月25日10時36分発行